

2014年度FDシンポジウム「学生のアクティブ・ラーニングを促すFD活動—e-ポートフォリオの活用と演習系課題—」
法学科におけるe-ポートフォリオの試み（2：分析・補足編）

2015年3月10日
静岡：共通A棟5階大会議室
浜松：S-Port 3階大会議室

0 後半の狙い

前半の井柳先生によるポートフォリオ実施体制の説明と教員からの反応の紹介、今後の課題の提示を受けて、後半では、2014年度後期法学科で実施したポートフォリオの結果からどのような示唆が得られるか、若干の検討を試みたのち、今後よりよく活用していくための指針を考えてみる（やや気の早い話ではあるが）。

1 実施結果から見えること

⇒資料（定性データ整理）を参照。

まずポートフォリオ（活動結果）への学生の記入内容の整理を、サンプル（34名分）を用いて行いたい。

(1)記入されている（空欄（特になしを含む）が少ない）項目
専門分野の学習、専門外の教養の学習、ゼミ等での報告・学習、部活動・サークル、アルバイト、自分の長所・短所、趣味の充実。

(2)空欄（「特になし」などを含む）の要因（推測）
①該当する活動をしていない、②関心が（あまり）ない、③他の項目で記入した内容と重複する、④じっくり振り返ってみると記入できる活動をしていたのかもしれないが、敢えて振り返るだけの動機と余裕がない、⑤ポートフォリオに取り組む動機と余裕が乏しい、⑥学生と指導教員の間柄：ポートフォリオを誰にどのように読まれるつもりで書いているか。

2 今後どのように取り組んでいけばよいか

(1)法学科の実施結果の諸要因

実施結果の極めて大雑把な第一印象でいえば、学生の取り組み方はまちまち。

その原因として推測されること：①マニュアルを読み、それに沿って記入していたか否か（⇒井柳先生の報告）、②学生のポートフォリオへの取り組みの動機付け。とくに、ポートフォリオの目的と効能についてどれだけ飲み込んでいるか、またどれだけニーズを感じているか、③学生の学生生活（学修、課外活動、キャリアデザイン）への意欲、④学生と教員との関係・日頃の指導による違い。

このような形で、ポートフォリオを運用し続けることだけでも、一定の意義があるだろう。少なくとも、指導学生に、半年に一遍、学生生活について、項目別に自由記述アンケートを行う（回収率が100%に近い）ことにはなるわけで、アンケートを通じて、学生の気質や学生の関心の所在や学生生活への不満などを汲み取るあるいは推測することができる。今回のように匿名化して回答を

分類すれば、学生のより一般的な雰囲気は今までよりも詳しく知ることができるだろう。そのメリットは小さくはない。

しかし、取り組みを形骸化させないように動機を確保するためには、アンケートとしての意義だけでは足りない。まず大切なのは、④を踏まえつつ、個別的に最大限有効活用されるようにすること。法学科ポートフォリオの第一の狙いは、学修指導と就職支援において学生と教員の関係を円滑にするための道具を提供することである。また個々の教員が個々の学生と築いている関係の中で、記入内容の趣旨が理解できるということが少なくない。ただそれだけでも十分ではないように思われる。とくに②と③についてはいま一度確認・検討しておく必要がある。「学生生活を見直すきっかけが与えられた」「指導学生の知らなかった一面がわかった」から先に進むための手掛かりを見つけ出したい。

(2)法学科ポートフォリオに関わる現在の指導・支援体制

(井柳先生の報告の繰り返しになるが) ポートフォリオの目的は、**学修指導** (+学生生活のサポート) と **就職支援** の両方にある。

・学修指導：教員（法学科では、2～3年生では所属ゼミ担当教員、1年生は新入生セミナー担当教員、4年生は元所属ゼミ担当教員）による学修指導について、成績不振者に対する指導教員による履修指導が定期的に行われており、実際ゼミでコンスタントに会う学生に関しては、教員は取得単位数などの客観的・形式的状況をかなりの程度把握している（成績不振者への指導は、人文社会科学部全体での取り組み）。また法学科において、折々に学生との面談を行っている教員も少なくなく、そこではより踏み込んだ指導や助言がなされている。ただ、どの程度細かくケアしているか（例えば取得単位数に基づいて時間割作成のアドバイスなどを行っているか） は、教員によって違いがある。

・就職支援：教員による違いがより大きいと思われる。全学・学部の就職関連企画は、全ての学生に開かれている。また学生の進路の希望に関しては、ゼミでのやりとりや面談などを通じて、ある程度把握されているが、個々の学生の状況に見合ったより突っ込んだ具体的な進路指導のあり方については、教員によって違う。

(3)ポートフォリオがどのようなメリットをもたらしうるか（ポートフォリオに期待しうる効能）

(A) 学修指導

(a) eポートフォリオ導入の一般的な目的

森本康彦はeポートフォリオの「本質的な要件」として以下を挙げている（森本 2012、36頁）。

- 学習の証拠（エビデンス）としての役割を担う。
- 学習者の客観的能力を測定するのではなく、学習者のパフォーマンスを評価する。
- 評価活動（自己評価、相互評価など）を通して次のことが促進される。
 - ・リフレクションの誘発
 - ・自律的な学習の生起
 - ・能力開発・成長
- 相互作用を促進する橋渡し役となり、コミュニティ（学びの共同体）の構築が期待できる。

その上で森本は、「eポートフォリオ活動」として以下のプロセスを示している（森本 2012、29 頁にメモを加えた）。

活動名	説明	法学科ポートフォリオ	
ゴール設定	自らの学習を見通し、ゴールを設定する。学習者は、ゴール設定を受け、学習の方略を計画したり (planning)、学習プロセスの途中では、その計画を修正(revision)したりする。	既に設定されている諸項目に沿って、学生が目標を立てる (2015年4月から実施)	
ルーブリック作成・確認	学習に際してルーブリックの作成または確認を行う。ルーブリックとはパフォーマンスに基づく評価において用いられる採点指標となる評価基準表であり、学習者が作成する場合と教師など学習を誘導するものが作成する場合、共同で作成する場合がある。	どのような活動に関して評価していくか (6つの大項目)、また大まかな評価基準は、既に決まっている。学生は評価基準に沿って、主観的に評価する。	
セレクション	学習プロセスにおいて作成されたeポートフォリオ群の中から、学習の証拠 (エビデンス) として有意なeポートフォリオを自らが吟味し精選することによって、自らの学習プロセスおよび学習成果等を振り返り、引証付けを行う。		
評価活動	自己評価	学習者自らが学習の状態を評価し、それによって得た情報によって自己を内省し、自身の学習を調整する。	ポートフォリオへの記入・過去の記入内容との比較
	相互評価	学習者同士が相互に学習プロセスや成果について評価し合う。相互評価は、学習者をより自律的にさせ、学習動機を高めたり、仲間同士が評価し合うことにより、相手の成果から学んだり事故の内省を促すことができるなど、多くの優位性が指摘されている。	
	教師評価 他者評価	教師が評価を行う教師評価や、専門家や保護者による他者評価により、学習者へのフィードバックが起こり、学習者の自己評価が促される。	指導教員によるチェック (既読ボタン)、コメント + 就職支援での活用

(B) 就職支援

鈴木敏恵によるキャリアポートフォリオの説明 (鈴木 2014、1-55 頁)。

- ・ポートフォリオ=これまでやってきたこと、身につけたこと、自分の持ち味や関心、センスやビジョンなどが伝わる1冊のファイル。
- ・①自分の「願い」「目標」を書いた「ゴールシート」を1ページ目に入れる。②自分の「得意なこと」「好きなもの」「関心があるもの」(写真・雑誌の記事など)。③自分がこれまでやってきたこと (学会発表、研修資料、読書歴、ボランティア歴など)。④今の自分をつくったもの (習いごとの記録、講習会、学会など、関連する領収書など)。⑤自分がつくったもの (論文、作品、レシピ、絵など)。⑥自分がこれまで手に入れてきたもの (表彰状、寄せ書き色紙、手紙など)、学んだこと、研修資料。
- ・「入れる」「めくる」「気づく」。

・ 8つの機能：①**意識化**（目的・目標の明確化、課題発見をしやすいとする）、②**一元化**（バラバラの情報を時系列につなぐ）、③**俯瞰**（部分と全体の関係が見える、思考特性・行動特性が見える）、④**可視化・顕在化**（成果・成長、経験知・暗黙知、課題が見える）、⑤**価値化**（個々の関係性の認知、経験の意味づけ、自己効力感・自尊感情が高まる）、⑥**行動化**（自律的行動を促す、トライ&エラーを促す）、⑦**評価・フィードバック**（経験から学ぶ）、⑧**ストーリー化**（過去・現在・未来を文脈でつなぐ、オリジナルのストーリーを生きる実感を持つ、経験やその時の感情に価値を見出す）。

・セルフコーチングの重要性：「**リフレクション**」（自分の思考と行動の反省）と「**リフレーミング**」（見方を変える）

○鈴木が説明しているのは、基本的には自分自身で自らのキャリア形成を行っていく際に用いるポートフォリオについて。

○8つの機能のうち、③については法学科ポートフォリオから一定の実益が得られるのではないかと（丁寧に記入しない学生でも、取り組み方などから一定の傾向を看取できる）。④についてもこれまでよりなされる方向になろう。これに対して、②は情報を集約できる仕組みにしないと難しい。また⑤、⑥、⑦がうまくいくかどうかは、個々の学生の状況・性格に依存する。

○初めからポートフォリオの各欄に多く書き込める、書き込みたい内容を持っている、そのような生活を送っている学生については、さほど心配する必要はないかもしれない（もちろん学生生活を結果に結びつけていくためのサポートは必要だが）。より問題なのは、そのような生活を送っていない学生を、どのようにサポート・ケアするかであろう。例えば、授業に対して受動的で単位取得で汲々としており、部活動・サークル活動にそれなりのコミットメントがあり、アルバイトにもそれなりに時間を割いているけれども、それ以上に自分から何かをやってみようという意欲がさほどない学生に、⑤⑥⑦の動機を持つように促すためには、何が有益か。ポートフォリオの記入とそれを用いた指導を、そのために活用する手立ては何か。

(3) 大学教育とキャリアとの接続の難しさ

一つここで指摘すべきは、ポートフォリオの活用可能性は、やはり大学のカリキュラムのあり方と非常に大きく相関している、ということである。大学のカリキュラムからの裏付けが不十分な状態でポートフォリオを運用するとなると、どうしてもポートフォリオへの取り組みの動機付けは不足せざるをえないだろう¹。

¹ 参考に、eポートフォリオをより本格的に導入している大学の事例を若干紹介しておきたい（参照、文部科学省 2014）。

○山形大学：大学教育GPとして、教養教育と専門教育の垣根を取り払い、カリキュラム編成を学科レベルから教育プログラムごとのものに変更、そこに各学生にあった教育プログラムについて教員が修学指導を行う、YUサポーティングシステムを導入した。山形大学の学習ポートフォリオシステムは、このYUサポーティングシステムと連動する形で、学生の履修状況等を教員と本人が確認できるようにするために設けられた。狙いは「到達目標を明確にした自己実現学習システム」の構築。<http://www.yamagata-u.ac.jp/ky-k/k-gp/04.html> など参照。

○自由が丘産能短期大学：「就業力ポートフォリオ」。授業や体験学習、アルバイトや課外活動、日常生活のテーマについて記入、テーマごとに「どのような学習を行ったか」「体験を通して、あなたに影響を与えた場面」などの項目に沿ってポートフォリオを作成する。教員はコメントを記入して返す。ポートフォリオは、卒業レポート（テーマ：就業体験と私のキャリア）において活用される。<http://www.sanno.ac.jp/tandai/employability/portfolio.html>、またhttp://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/shugyou/1296632.htm など参照。

そういうことと言えば、法学科は卒業後の進路により直接的に結びつくような科目や授業内容をもっと多く用意すべきなのかもしれない。しかし他方で、カリキュラムのあり方の見直しについては、懐疑的な意見も多くある。このあたりの話はもはや耳タコであろうが、敢えて述べると、小方直幸は、「コンピテンスモデル」の台頭を指摘している（小方 2013、64-65頁）。

コンピテンスモデルの特徴は、〔従来の〕モデルが基本的に教育の供給者型であったのに対して、需要者型という点にある。需要者型と供給者型の決定的な相違は、需要者型は、学問的な知識体系の存在や、研究活動への参画を否定するものではないが、それらを必ずしも前提として求めない、という点にある。どういう内容かつ方法で当該能力を修得させるかは一応、各大学に委ねられている。なぜならば、それは教育の目的に対する手段に過ぎないからである。

伝統的モデルにおいて、学問の修得や研究への参画は目的であり、そのことを通じて獲得した能力や態度が、職業世界に寄与することはあっただろうが、それ自体が目的化してはいなかった。そこで獲得した能力は、各々の学問分野や大学という場での学びという文脈性に依存し、汎用性として打ち出すこと自体が困難という率直な事情もあった。コンピテンスモデルにおいては、汎用的能力の修得自体が目的であり、学問の修得や研究への参画は、必要であれば依拠しても構わない、二次的な位置づけに格下げされている。産業界が求める人材の方向性は、教養ある人間の能力資質や大学教育の本来の目標とも重なるようになってきている（…）という見方は、一面では可能かもしれないが、汎用性は脱学問という力学も内包していることには留意がいる。

とはいえ、ひとまずできることから始めていくべきである。

(4)ポートフォリオをどのように運用していくべきか

- ポートフォリオを通じた学生生活の定期的チェックを続けていく（経過観察）
- 既存の学修指導・就職支援の体制の下で、より細やかなサポートをしていくための一助とする
- 就職支援とのより緊密な連動・就職支援の充実

なお、小川賀代は、2011年10月段階でのeポートフォリオ導入事例として以下を挙げている（小川 2012、46頁）。小川も述べているが、ポートフォリオの導入が、教育・保育や医療といった、大学のカリキュラムと資格取得とがより密接につながっている学部で多くなされていることは、ポートフォリオが今後どこまで普及するかを考える上で示唆的であると思われる。

授業単位		名城大学、電気通信大学、東京学芸大学、富士常葉大学、Fレックス（福井県大学連携プロジェクト）、他
学部・専攻単位	教育・保育	信州大学、兵庫教育大学、奈良教育大学、金沢大学、秋田大学、慶應義塾大学、愛媛大学、中部学院大学、奈良佐保短期大学、北海道教育大学、東京学芸大学、岡山大学、鳴海教育大学、他
	医療	島根県立大学、大阪医科大学、東京大学医学部付属病院、名古屋大学医学部付属病院、他
	学部・専攻	熊本大学、日本女子大学、鎌倉女子大学、青山学院大学、法政大学、他
大学単位		関西国際大学、金沢工業大学、帝塚山大学、大手前大学、山形大学、東洋大学、三重大学、弘前大学、熊本大学

- 成績・提出レポートなどの記録と結びつけるかどうか
- 学生相互でポートフォリオのチェックを行ったほうがよいかどうか

- ポートフォリオの蓄積と結果の整理分析がカリキュラムの漸進的な見直しの契機になる可能性？
キャリアを意識したカリキュラム改革？

【参考文献】

- 梅崎修・田澤実編著（2013）『大学生の学びとキャリア』法政大学出版局。
- 小方直幸（2013）「大学における職業準備教育の系譜と行方—コンピテンスモデルのインパクト」、
広田照幸他編『教育する大学—何が求められているのか』（シリーズ大学5）岩波書店、49-75 頁。
- 小川賀代（2012）「日本におけるeポートフォリオの普及」、小川賀代・小村道昭編著（2012）『大学力を高めるeポートフォリオ—エビデンスに基づく教育の質保証をめざして』東京電機大学出版局、44-50 頁。
- 鈴木敏恵（2014）『キャリアストーリーをポートフォリオで実現する』日本看護協会出版会。
- 森本康彦（2012）「eポートフォリオの普及」、小川賀代・小村道昭編著（2012）『大学力を高めるeポートフォリオ—エビデンスに基づく教育の質保証をめざして』東京電機大学出版局、24-41 頁。
- 文部科学省（2014）『大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック』リベルタス・コンサルティング。